

三島由紀夫『金閣寺』論

—△私▽の自己実現への過程—

有元伸子

はじめに

作品『金閣寺』(『新潮』昭和三年一—一〇月号)の中で、「金閣を焼く」という行為に關しては、従来から大きく二つの説に分かれています。一つは、現実の金閣を焼くことよって、戦争末期のように絶対的な金閣との一体化の知覚を取り戻そうとしたと読む説であり、もう一つは、自分の内界にある金閣の絶対性を解放して真に相対的な生に生きようとしたと解釈する説である。

しかし、作品『金閣寺』ではこの二つの読みが並立するのを許容するように描かれているのであって、『金閣寺』内部からは、主人公がどちらの方向をとったのかは明らかにされてはいない。金閣が、現実と幻想との二面性をもたされ、かつ、主人公がそれに対して二極分解した態度を示している以上、二つの読みの可能性が出てくるのは自明のことなのである。

問題にされるべきなのは、金閣を焼いたあと、絶対的な金閣と一体化することにせよ、自分の内界にある金閣の絶対性を解放することにせよ、いずれもまさに認識の問題だということなのである。主人公は、金閣を焼く前に、その行為が無駄であることに思っていた

て深い脱力感に襲われるが、いまや行為は「徒爾」であること知りながら、「徒爾であるからこそ」金閣を焼く。先の二つの読みからは、この、徒爾であるからこそ、無駄であるからこそやらなければならないとする、金閣を焼く「行為」自体の意味が出てこない。

結局、これまでの評価では、行為自体の意味についてはほとんど明示されておらず、また、『金閣寺』の内部においても、主人公△私▽(溝口)の「吃り」の意味あいや、しばしば現れ出てくる有為子の幻想と金閣寺との具体的な関係などについても、分析の余地が残されている。

ここで、『仮面の告白』について簡単に述べるならば、『仮面の告白』の主人公は、「変形エディプス・コンプレックス」ともいえる状況の内にと育ったことよって、現実すら幻想化してしまい、外部から期待される社会的役割・性役割に同化していけない人物として描かれている。この『仮面の告白』との相関から、私は、拒まれた者・溝口の行為を性・性役割の問題として評したいと思う。簡単に結論を述べておくと、「金閣を焼く」という行為が、△私▽にとっては男性性を獲得することとして捉えられていたと考えるのである。(そのような考え方が、倫理に照らしてみても一般的ではなく、

△私▽なりの特異な把握であることもまた確かなのだが。本稿では、この特異な、△私▽なりの自己実現の試みが、作品『金閣寺』の中で押し進められていく過程を跡づけていきたい。

はじめに、主人公の「吃り」の意味について考えておきたい。

体が弱く、駄足にしても鉄棒をやつても人に負ける上に、生来のお寺の子だと知つてゐた。悪童たちは、吃りの坊主が吃りながらお経を読む真似をしてからかつた。講談の中に、吃りの岡つ引の出でくるのがあつて、さういふところをわざと声を出して、私に読んできかせたりした。

吃りは、いふまでもなく、私と外界とのあひだに一つの障壁を置いた。最初の音がうまくな。その最初の音が、私の内界と外界との間の扉の鍵のやうなものであるのに、鍵がうまくないたためがない。一般の人は、自由に言葉をあやつることによつて、内界と外界との間の戸をあけつばなしにして、風とほしをよくしておくことができるのに、私にはそれがどうしてできない。鍵が錆びついてしまつてゐるのである。

△私▽は、虚弱な体質で、運動も得意ではなく、寺の子である。つまり、他の子供たちよりも弱く、異端視され、他の子供たちからからかわれる存在なのである。加えて、△私▽は、吃音のために、外界からの疎外感を抱いている。言語とは、社会化された記号の体系であつて、それがスムーズに機能しない——自己を表出しようと言葉を口から出すたびに苦勞し、円滑に話そうとするために焦燥

し、それでも他の子供から嘲笑される——ということは、言語活動の異常というだけではなく、本人には、社会に出にくい思いとなつて、社会活動の際の異常として意識されてしまう。△私▽は、その疎外感を「私と外界とのあひだ」に置かれた「障壁」として表現している。この場合、外界とは、△私▽の外にあつて、△私▽にさまざまな役割を遂行することを迫ってくる社会なのである。これについて、同じく第一章で、△私▽は、「私はたとへ兵隊になつても目の前の下士官のやうに、役割に忠実に生きることができるかどうか」と躊躇しており、その疎外感が、兵役といった男性としての社会的な役割への不安から来ていることがわかる。つまり、主人公は、男性役割への不適応感を抱いているのである。

そして、外界からの疎外感・男性役割への不適応感をもつ△私▽は、「二種類の相反した権力意志を抱くやうに」なる。一つは、「歴史における暴君の記述」への憧憬として意識されるように、自分と外界との間に存在する障壁を打ちこわすことによつて外の社会へ出ていきたいという思いであり、もう一つは、「内面世界の王者、静かな諦観にみちた大芸術家になる空想」に示されているように、外界への扉を閉ざし内界に閉じこもることによつて自己表現をした、つまり内界に自閉していたいという願ひである。即ち、主人公の中には、吃りによる男性役割からの疎外感の中で、外界に出たいという思いと、外界に出たくない・内に閉じこもりたいという思いの、二極分解した願望が存在しているのである。そして、この二つの願望は、主人公の行動を規定する原理として、作品全体の基底に流れつつける。

では、なぜ、このような、「吃り」からきざす矛盾した願望が生

じたのだらうか。作品『金閣寺』は、「幼時から父は、私によく、金閣のことを語つた」という一文で始まる。

幼時から父は、私によく、金閣のことを語つた。(略)

写真や教科書で、現実の金閣をたびたび見ながら、私の心の中では、父の語つた金閣の幻のほうが勝を制した。父は決して現実の金閣が、金色にかがやいてゐるなどと語らなかつた筈だが、父によれば、金閣ほど美しいものは地上になく、又金閣といふその字面、その音韻から、私の心が描きだした金閣は、途方もないものであつた。

「私の心の中では」、「現実の金閣」よりも「父の語つた金閣の幻のほうが勝を制」す。そして、「金閣といふその字面、その音韻から、私の心が描きだした金閣は、途方もないものであつた」という説明から、△私▽は、父親の言葉に導かれて、美の極致としての金閣の幻想を内面世界に作りあげたことがわかる。しかも、「田舎の素朴な僧侶で、語彙も乏し」かつた父は、ただ、『金閣ほど美しいものは此世にない』とのみ教えた。抽象的な「美」そのものという観念だけが、△私▽の内界でふくれあがつていくのである。

まだ見ぬ金閣にいいよ接する時が近づくにつれ、私の心には躊躇が生じた。どうあつても金閣は美しくなければならなかつた。そこですべては、金閣そのものの美しさよりも、金閣の美を想像しうる私の心の能力に賭けられた。(略)

夜空の月のやうに、金閣は暗黒時代の象徴として作られたのだった。そこで私の夢想の金閣は、その周囲に押しよせてゐる闇の背景を必要とした。(略)人がこの建築にどんな言葉で語りかけても、美しい金閣は、無言で、繊細な構造をあらはにし

て、周囲の闇に耐へてゐなければならぬ。

そして、その△私▽の内面世界の幻想の金閣は、「どうあつても」「美しくなければならなかつた」のであり、「闇の背景を必要とした」のであり、「周囲の闇に耐へてゐなければならぬ」のであつた。

つまり、ここで表されている金閣の美しさは、「³なければならぬもの」と強迫的に思いこまれてゐる、△私▽にとつては理念的な、イデアとしての像なのである。また、「美がたしかにそこに存在してゐるならば、私といふ存在は、美から疎外されたものなのだ」と、イデアとしての金閣の像は、自分自身を疎外する存在として考えられるほど、△私▽の心の中で、絶対の美として作られていく。そのため、主人公は、まだ見ぬ実際の金閣に近づくことに「躊躇」を感じてしまふ。現実の金閣が、自分の心象と異なつていた場合に、イデアとしての金閣を壊してしまうことを恐れるからである。

つまり、△私▽は、金閣によつて、現実³に直面することを(つまり、外界に出ることを)避けたいと思ひ、また、自分が作り上げたイデアとしての金閣の像が絶対の美であるがゆえに、自分が社会から疎外された存在だと信じてゐるのである。これは、「吃り」による社会からの疎外感と、そこから引きおこされた、大芸術家となつて内界に自閉していたいという思いに重なる。彼が、内界に自閉するのは、イデアとしての金閣を守るためなのである。そして、その自己を社会から疎外する、絶対の美である金閣が彼の心中に生じたのは、父親の言葉に触発されてであつた。△私▽にとつて、金閣は、崇拜者である自分を疎外するほどの絶対の美として、憧憬の対象であるとともに、自己と社会との間に立ちふさがつて、自己を社会から疎外してしまふ存在でもあつたのである。言語活動が始まつたばかり

の幼児期から、父親の言葉によって、このようにアンビバレントな金閣の像が延々と刷り込まれていったことで、△私▽は内面世界に逃避し、頑迷にその中に引きこもり、「吃り」という言語による外界からの保身を身につけてしまったのである。

「美は……」と言ひさすなり、私は激しく吃つた。埒もない考へではあるが、そのとき、私の吃りは私の美の観念から生じたものではないかといふ疑ひが脳裡をよぎつた。「美は……美的なものももう僕にとつては怨敵なんだ」

後に、△私▽自身も、自分の吃音が、最初に考へていたように「生来」のものではなく、心中で観念化して守っている「美」のために吃るのではないかと疑い、「美」を「怨敵」だと自覚していくにいたるのである。

つまり、主人公の「吃り」は、金閣によって生じ、言語異常として形づくられた、社会的役割からの疎外のあらわれだということができる。

二

次に、その△私▽が疎外されている男性性と対をなす、女性的なるものをみていきたい。

作中で鍵をにぎる女性は有為子である。少年時代、溝口は彼女と憧れ、朝早く自転車で出勤する有為子を待ち伏せするが、彼女から「吃りのくせに」と罵倒されてしまう。△私▽にとって、対女性の原体験であり、△私▽は、「吃り」のために、女性とうまく関係が結べないのだと知覚するのである。そして、このときの有為子は、「吃り」を疎外する子供たちや社会と同様に、△私▽を拒絶する現

実そのものである。しかし、有為子が、人間的に△私▽に対峙する、現実の存在として現れたのは、この一件だけであつて、次に登場する時の彼女は、もつと観念的な原型的な像として現れる。

私はいへば、日はたきもせず、有為子の顔ばかりを見つめてゐた。彼女は捕はれの狂女のやうに見えた。月の下に、その顔は動かかなかつた。

私は今まで、あれほど拒否にあふれた顔を見たことがない。私は自分の顔を、世界から拒まれた顔だと思つてゐる。しかるに有為子の顔は世界を拒んでゐた。(略)

私は息を詰めてそれに見入つた。歴史はそこで中断され、未来へ向つても過去へ向つても、何一つ語りかけない顔。(略)ただ拒むために、こちらの世界へさし出されている顔……

脱走兵をかくまっていた有為子が、憲兵に詰問されながらも、頑くなに押し黙っている場面である。彼岸にいて、「世界を拒んでゐた」と評される月下の有為子の美しさは、これまで多く指摘されてきているように、敗戦の日の金閣の美しさと重なる。「世界を拒む」——世間的な道徳や社会的慣習を拒絶して、超然と存在している——有為子の姿は、生身の女性というより、原型的であり、△私▽にとっての金閣の像と相似した性格をもっている。そして、△私▽はといへば、有為子と隔たつたところから、ただ、「見つめ」、「見入る」だけの存在なのであり、「吃り」のため言葉が出ず、外界と結びつけないことで、有為子から敵然として拒まれながら、憧憬し、見入っている認識者なのである。そして、このあと、有為子は脱走兵に射殺されるのだが、その場面で△私▽は不自然に眠りこんでしまう。⁽³⁾白昼夢のような入眠状態のなかで、有為子の姿は、△私▽の無意識

下に刻みこまれていくのである。

始め、有為子は、「吃り」である△私▽を拒む外界そのものを（やがて、△私▽はそこへ出ていかなければならないのだが）体現して、登場した。次いで、月下の有為子は、その外界をも拒む絶対者に変貌するのだが、△私▽の内界には、この変貌が未消化なまま取りこまれてしまう。つまり、有為子は、△私▽を疎外する外界・人生そのものの像でありながら、一方では、その外界を拒絶して吃立している像としても知覚されているのである。この有為子の二面は、アンビバレントでありながら、△私▽には、それと意識されないで、曖昧な状態で併存し、時によって貌を変えて出現してくるのである。

こうして、原型として無意識下に刻みこまれた有為子は、肉体は消滅しても、幻影として作品中に何度も現れ出てくる。南禅寺の女、米兵相手の娼婦、柏木の相手であるスペイン風洋館の令嬢など、女性の姿に投影されて、「よみがへつた有為子その人」として△私▽の前に現出し、△私▽を支配しつづけるのである。有為子は、金閣と同様に、拒まれた者のコンプレックスが作り上げて、超越者としての役目を与えられた、観念的存在なのである。

そして、金閣が△私▽を人生から隔離してしまおうという事態がおこる。

友人の柏木が紹介してくれた下宿の娘と自己との間に金閣が立ち現れ、「私と、私の志す人生との間に立ちはだかり」、人生から遮断してしまつた、と△私▽が感じる場面をみてみよう。

私はむしろ目の前の娘を、欲望の対象と考へることから遁れようとしてゐた。これを人生と考へるべきなのだ。前進し獲得

するための一つの関門と考へるべきなのだ。今の機を逸したら、永遠に人生は私を訪れぬだらう。（略）……私はやうやく手を女の裾のはうへにらせた。／＼

そのとき金閣が現はれたのである。（略）

下宿の娘は遠く小さく、塵のやうに飛び去つた。娘が金閣から拒まれた以上、私の人生も拒まれてゐた。限なく美に包まれながら、人生へ手を延ばすことがどうしてできよう。美の立場からしても、私に断念を要求する権利があつたであらう。一方の手の指で永遠に触れ、一方の手の指で人生に触れることは不可能である。

「永遠（絶対の美である金閣）」と「人生（相対的で有限な人間の生）」との両方を志向し、手にいれることは不可能だ、と△私▽は考へる。絶対と相対とが相反する両極であることは当然である。しかし、ここで、問題なのは、△私▽が自明のこととして前提にしている「娘（女性）≡人生」という考え方である。人間にとって異性と関わり合うことが重要であることは言うまでもない。男性にとつて、女性との交渉だけが「人生」として感じられるという事態は、一見奇異ではあるが、「異性と交渉する」という一事だけが頭を占め、それを「人生」そのものように思い込んでしまうことは、青春期には普遍的にみられることであらう。しかし、この主人公の場合、その思い込みが、あまりに意識的になされすぎているのである。対象である娘を、「女性一般≡人生」へと抽象化してしまい、一人の娘の肉体と関わり合うことで人生を手に入れることができるという前提に立っている。そして、△私▽は、引用部の前半にあるよう

た。これを人生と考へるべきなのだ。……一つの関門と考へるべきなのだ」と思い込み、現実の一人の娘を、即、「人生」という観念と結びつけているのである。女性を生身の存在として捉え、自然な感情の発露に伴って係わっていくのではなく、以前の女性を「人生」と考へるべきなのだ」と、観念化した上で係わろうとしている。「吃り」によって、社会的役割からあるいは男性性から疎外されているという確信、また、有為子との原体験によって生じた、女性から拒まれていくという思いが、このような不自然な観念上の操作を呼んでいるのであろう。

今の引用に少し先立つ場面を見ておきたい。

私の心は和み、やうやうのこと恐怖は衰へた。私にとつての美といふものは、かういふものでなければならなかつた。それは人生から私を遮断し、人生から私を護つてゐた。

『私の人生が柏木のやうなものだつたら、どうかお護り下さい。私にはとても耐へきれさうもないから』

と私は殆んど祈つた。

柏木が女性とかかわりをもつやり方を見て恐怖感を抱き、金閣のもとに駆け戻り、金閣を見ることよつて安らぎを取りもどす場面である。「私にとつての美といふものは、かういふものでなければならなかつた」として、金閣に向かつて、「人生から私を遮断し、人生から私を護」ることを願っている。つまり、△私▽の願望によつて、理念としての金閣は、△私▽を人生から庇護しているのだ。

女性から隔てられたとき、△私▽は、「金閣はどうして私を護らうとする？ 頼みもしないのに、どうして私を人生から隔てようとする？」と呪詛する。しかし、△私▽自身が、「人生から自分を遮断

し、護るべきもの」として金閣を想定し、ここでまた、下宿の「女」を「人生」であるべきだと設定した以上、金閣が出現し、彼の邪魔をするのは、必然である。すべては、△私▽がこうあるべきだと設定した、「金閣」と「人生」との性格が背反していることから引き起こされたのである。しかし、△私▽は、男性役割を果たしえず、人生から疎外されたことを恨んで、金閣を呪詛する。

三

次に、その呪詛のあまり、△私▽が金閣を焼くに至る過程を追つていきたい。作品『金閣寺』には、金閣放火へと漸層的に高まつていく、「悪」をめぐるいくつかの挿話の積み重ねがある。たとえば、作品の開始早々に紹介される、海軍機関学校の生徒の短剣を傷つける挿話などもその一つであるが、ここでは、次の二つの場面を見ておきたい。

始めに、終戦後のある雪の日の朝、アメリカ兵に強要されて、連れの女の腹を踏まされる場面だが、以下はその時の回想である。

しかし私のゴム長の靴裏に感じられた女の腹、その媚びるやうな弾力、その呻き、その押しつぶされた肉の花ひらく感じ、或る感覚のよろめき、そのとき女の中から私の中へ貫ぬいて来た隠微な稲妻のやうなもの、……さういふものまで、私が強ひられて味はつたといふことはできない。私は今も、その甘美な一瞬を忘れてゐない。

(略)ふしぎなことである。あの当座には少しも罪を思はせなかつた行為、女を踏んだといふあの行為が、記憶の中で、だんだんと輝きだしたのである。(略)あの行為は砂金のやうに

私の記憶に沈澱し、いつまでも目を射る煌めきを放ちだした。悪の煌めき。さうだ。たとへ些細な悪にもせよ、悪を犯したといふ明瞭な意識は、いつのまにか私に備はつた。勲章のやうに、それは私の胸の内側にかかつてゐた。

もともと、女を踏むときには、△私▽にとって何かが変わることが期待されていたわけではない。米兵に強要され、仕方なく行為したにすぎないのである。しかし、その行為がのちになつて意味をもつて△私▽の中に再現されてくる。女性を踏みつけ、蹂躪したというところが、△私▽には「甘美」と感覺され、「女を踏んだ」という行為が、記憶の中で、だんだんと輝きだし、「悪を犯した」といふ明瞭な意識が△私▽の中でわきおこってくるのである。ここでは、二つのことが問題となる。一つは、女性を踏んだということである。

「女の中から私の中へ貫いて来た隠微な稲妻のやうなもの」を「味はつた」と表現されるように、女性からの手応えを得ており、この事件によつて、歪んだかたちではあるが、△私▽はそれまで拒まれていた女性との交渉を得るのである。もう一つは、その行為が、「悪」として意識され、しかも「甘美」な記憶として、快樂として内面化されていったことである。「悪」の行為によつてはじめて女性からの手応えを得て、△私▽は、それまで疎外されていた男性性を自覚し、「甘美な」感覺を味わうのである。この事件も、金閣放火への一ステップといえる。

また、ある夕方、女を同伴している老師の跡をつけたと誤解されて、△私▽は老師に叱責され、二人の関係は悪化する。そして、△私▽は、この女の写真を手に入れて、老師に届けるという反抗的態度をとるのだが、以下はその後の△私▽の心の動きである。

自室に座つて、学校へゆくまでのその間、鼓動のいよいよ高まるのに任せながら、私はかうまで希望を以て何事かを待つたことはない。老師の憎しみを期待してやつた仕事であるのに、私の心は人間と人間とが理解し合ふ劇的な熱情に溢れた場面をさへ夢みてゐた。

老師は突然私の部屋へ来て、私をゆるすかもしれないかつた。ゆるされた私は、生れてはじめて、鶴川の日常がさうであつたやうな、あの無垢の明るい感情に到達できるかもしれないかつた。老師と私はおそらく抱き合ひ、お互ひの理解の遅かつたのを嘆くことだけが、あとに残されるに相違なかつた。

(略)今夜の講義で老師と面と向つて座ることに、私は、甚だ私に似合はぬことではあるが、一種の男性的な勇氣ともいふべきものを自ら感じてゐた。そこで老師はこれに應えて男性的な美德をあらはし、偽善を打ち破り、寺の一同の前でおのれの行状を告白して、その上で私の卑劣な行為を問責するだらうと思はれたのである。

やはり、金閣放火に向けて小説内で漸次高められていく「悪」の第三ステップである。注目すべきことに、その悪のあと、△私▽は、「人間と人間とが理解し合ふ劇的な熱情に溢れた場面」を夢見る。老師の側からみれば、苦々しくはあるが、児童に等しい弟子の行為にすぎない。しかし、△私▽の方は、その行為によつて、「ゆるされ」るにせよ、「問責」をかうにせよ、老師との間に、「抱き合ひ」、「面と向」い合うやうな劇的な場面が引き起こされることを期待していたのである。また、「甚だ私に似合はぬことではあるが」と注記を加えながら、「一種の男性的な勇氣ともいふべきものを自

ら感じてゐた」と高揚した気分で語っている。ここでは、「悪」を犯す行為が、それまで自分が疎外されていた「男性的な」ものとして知覚されているのである。結局、老師はこの件を不問に付して、 \wedge 私 \vee の期待は裏切られるのだが、しかし、この事件によって、 \wedge 私 \vee には、悪の行為が、男性性という自己の性アイデンティティを確認しうるものとして感じられるにいたつたのであった。

しかも、娼婦の腹を踏んだ際には、歪んだ形ではあつても、対女性との関係として男性意識が現れていたのであつたが、老師との一件では、もはや、女性との関係が消えてしまつて、「悪」を行爲することだけで男性性が獲得できるように、 \wedge 私 \vee には感覺されているのである。上野千鶴子氏の言うように、本来、性アイデンティティとは、男性性／女性性という相補的な関係によって成立している。にもかかわらず、ここでの \wedge 私 \vee は、「悪」を行爲することで、性役割を果たすことの代用とし、相補的な関係である女性性を切り離れた形で、いわば自己完結的に、男性としてのアイデンティティを確立しうるように知覚してしまつているのである。

このように、これらの挿話から、「悪」を犯す行為が、 \wedge 私 \vee にとつて甘美でかつ、それまで疎外されていた男性性を実現することとして知覚されていった過程が確認できたと思う。こうして、 \wedge 私 \vee の中で悪の行為への思いが漸層的に高まつていき、舞鶴の海を見ることによつて、『金閣を焼かなければならぬ』という想念を生み出す。それは、「別談への、私特製の、未聞の生がそのときはじまるだろう」と意識され、普通一般の男らしさといつたものではなく、 \wedge 私 \vee に特異な男性性として知覚されたのである。

しかし、実際には、 \wedge 私 \vee はなかなか金閣を焼く行為に出ること

はできなかつたのだが、次の場面では、禅海という和尚を通じて行為への勇氣を獲得する。

「私を見抜いて下さい」とたうとう私は言つた。「私は、お考へのやうな人間ではありません。私の本心を見抜いて下さい」

和尚は盃を含んで、私をじつと見た。雨に濡れた鹿苑寺の大きな黒い瓦屋根のやうな沈黙の重みが私の上に在つた。私は戦慄した。急に和尚が、世にも晴朗な笑ひ声を立てたのである。

「見抜く必要はない。みんなお前の面上にあらはれてをる」

和尚はさう言つた。私は完全に、残る隈なく理解されたと感じた。私ははじめて空白になつた。その空白をめがけて滲み入る水のやうに、行為の勇氣が新鮮に湧き立つた。

禅海和尚は、「父は何かにつけて禅海和尚のことを愉しげに話し、父が和尚に敬愛の心を寄せてゐることがよくわかつた」と、作品中で初めて登場してくる人格者である。しかも、同じ僧侶である \wedge 私 \vee の父や金閣の住職とは異なり、「身の丈は六尺にちかく、色は黒く眉は濃かつた。その声は轟くばかりであつた」とか、「粗削りな禅僧の典型であつた」とか描写される、「外見も性格もまことに男性的な」存在である。それまでの \wedge 私 \vee の環境では、父親は無力で病弱であり、住職も「桃色の餅菓子のような体」、「つやつやした柔い肉」という表現に象徴されるやうに、男性性が欠如して、兩者とも \wedge 私 \vee の規範に成りえなかつたのだが、 \wedge 私 \vee は、ここで初めて、自分が取り込むべき規範を見つける。そして、男性的な禅海和尚に「残る隈なく理解された」と感じたとき、「空白をめがけて滲み入る水のやうに、行為の勇氣が新鮮に湧き立」つてきたのである。ここでも、行為が男性性の象徴として捉えられている。

そして、△私▽は、金閣放火に取り組む。自己を社会から隔てている「吃り」が、金閣という美の観念によって生じたものであるならば、その美の観念を壊せば、内界と外界とが「吹き抜け」になるはずである。つまり、理念としての金閣を、悪の行為によって支配することによって、抑圧の表れである「吃り」の解消を計るのである。そうして、行為によって能動的に働きかけ、外界・社会に出ることが、△私▽にとって男性性を獲得することとして知覚されるのであることは、これまで述べてきたとおりである。

身は痺れたやうになりながら、心はどこかで記憶の中をまきぐつてゐた。何かの言葉がうかんで消えた。心の手に屈きさうにして、また隠れた。……その言葉が私を呼んでゐる。おそろく私を鼓舞するために、私に近づかうとしてゐる。

『裏に向ひ外に向つて逢著せば便ち殺せ』（略）

言葉は私を、随つてゐた無力から弾き出した。俄に全身に力が溢れた。とはいへ、心の一部は、これから私のやるべきことが徒爾だと執拗に告げてはゐたが、私の力は無駄事を恐れなくなつた。徒爾であるから、私はやるべきであつた。

冒頭でも述べたが、行為の前の無力感に襲われたあと、「徒爾であるから」、無駄であるからこそ「私はやるべきであつた」と思ひ到る。この箇所で、△私▽が行為へと踏み切ることになつた契機が、「言葉」であつたことに重大な意味を見る論がある。たしかに、「私を、随つてゐた無力から弾き出した」のは、「言葉」である。

しかし、この部分の「臨濟録示衆の章」は、行為と対立する認識の道具としてつきつめられた、それ自体意味のある「言葉」ではない。むしろ、呪文に近い、行為するためのスイッチのようなもので

ある。作品レベルでいえば、主人公を行為へと立ち向かわせるために、突然あらわれた機械仕掛けの神なのであつて、行為への契機となる言葉であれば、別に臨濟録示衆ではなくてもかまわなかつたのである。

言葉についてよりも、「無駄事を恐れなく」なり、「徒爾」に向かうとする△私▽の態度自体に興味を見るべきであらう。現実の金閣を焼くことによつて、それが象徴している美という観念が自分の心の中で消滅するかどうかは、認識の問題であつて、行為のあずかり知るところではない。「徒爾であるから」こそ「やるべきであつた」というのは、その行為のあとに自分がどのように認識するかには係わりなく、行為すること自体に興味を見出すという考え方なのである。これまで述べてきたように、行為すること自体は、

△私▽にとってそれまで拒まれていた男性性の証である。その、行為が男らしさを体現するということ自体も△私▽の認識にすぎないのではあるが、しかし、それは、単なる認識というより、謬見ではあつても、△私▽の中で培われ、成長して、行動へと衝き動かすやうに呪縛しつづける想念なのである。そして、△私▽は、男性性を体現する「行為」によつて、不安定だった自己の性アイデンティティを確かめようと確信していたのである。

四

こうして、△私▽は金閣に火をつけ、倫理性や一般性を排除した、△私▽なりの極めて特異な自己実現への試みがなされる。その際、男性性を回復する自己実現が、なまの人生とは切り離されて、観念的な「美をこわす」という行為自体においてなされたことが、

この主人公にとつての不辛だと言えよう。男性性／＼女性性という対偶関係の一方が欠如する形で、男性としての自己実現がなされたからである。つまり、△私▽が性アイデンティティを確認する際に、本来相補的であるはずの女性性が、△私▽の現実、意味をもつて立ち現れてこないのである。

具体的に見てみよう。

私はたしかに生きるために金閣を焼かうとしてゐるのだが、私のでゐることは死の準備に似てゐた。自殺を決意した童貞の男が、その前に廊へ行くやうに、私も廊へ行くのである。安心するがいい。かういふ男の行為は一つの書式に署名するやうなもので、童貞を失つても、彼は決して「ちがふ人間」などになりはしない。

あのたびたびの挫折、女と私の間を金閣が遮りに来たあの挫折は、今度はもう怖れなくていい。私は何も夢みてはゐず、女によつて人生に参与しようなどと思つてはゐないからだ。私の生はその彼方に確乎と定められ、それまでの私の行為は陰惨な手続きにすぎないからだ。(略)

暗い古い階段を二階へのぼるあひだ、私はまた有為子のことを考へてゐた。何かこの時間、この時間における世界を、彼女は留守にしてゐたのだといふ考へである。今ここに留守である以上、今どこを探しても、有為子はゐないに相違なかつた。彼女はわれわれの世界のその風呂屋かどこかへ、一寸入浴に出かけてゐるらしかつた。

私には有為子は生前から、さういふ二重の世界を自由に出入りしてゐたやうに思はれる。あの悲劇的な事件のときも、彼女

はこの世界を拒むかと思ふと、次には又受け容れてゐた。死も有為子にとつては、かりそめの事件であつたかもしれない。

△私▽は、金閣を焼く前に、自己の性アイデンティティを確認するために五番町の遊廊に行くのだが、ここで「有為子は留守にしてゐたのだ」と、恐らくは、拒まれた者としてのコンプレックスからだろうが、観念の女性・有為子と現実の女性との葛藤を巧妙に避けてしまつてゐる。つまり、有為子を、「今ここ」「われわれの世界」(現実)と「われわれの世界のそこ」(観念)との二重の世界に住むものと規定した上で、「今ここに留守である」と意識的に現実から席を外させてゐるのである。前述したように、有為子と金閣とは、原型として相似した性格をもつてゐるのだが、その有為子を自覚的に意識の上から遠ざけて現実の女性の肉体に向かうというのでは、金閣の呪縛から完全に脱し得たとは言いがたい。「私の生はその彼方に確乎と定められ」などとは言つてみても、「女と私の間を金閣が遮りに来たあの挫折」――下宿の娘や生花の師匠との体験――の時と、基本的には状況は変わつてゐないのである。△私▽は、むしろ逆に「女によつて人生に参与」すべきだつたのではないか？

△私▽は、「一つの書式に署名するやうに」形骸化させて女性と係わると言う。いわば、女性の肉体を観念的な「人生」としてしまふのである。しかし、そうではなく、肉体と精神とを統合した形で自然に女性と係わるることによつて、男性としての性アイデンティティを獲得する方向もあつたはずである。ここで、有為子と観念上の人生ではない女性との葛藤から逃避しないで、それに直面し、克服することができれば、△私▽にとつて、より強固で普遍的な自己実現が果たされたのではなかつたか。

有為子が、原型としてあまりに強固であり、生身の女性として立ち現れてこなかったのが、△私▽の悲劇であったといえる。しかし、「美」とはこうあるべきだという理念上の金閨のイメージ作りに始まって、女性に係わる際にも、それが人生であるべきだと思ひ、また、たとえ徒爾であってもやるべきだと目的を欠いた行為につきすすみ、というふうに、強迫的に固定された理念に呪縛されてしまひ、その理念の中身を変えようとも思ひつかず、変えることもできなかつたのが、『金閨寺』の主人公だったのであり、それが、男性性を獲得する行為の歪みとして現れてしまつたのである。

最後にもう一点、問題を敷衍してみたい。作品『金閨寺』は、主人公が「生きようと私は思つた」というところで閉じられる。この結末について、三島との対談の中で、小林秀雄が繰り返し「主人公を殺すべきだった」と述べている。小林はその理由を述べてはいないが、確かに、『金閨寺』で描かれたような男性性を発現する行為をつきつめていけば、無目的な行為——行為者の死にいきつくはずである。小林の再三の指摘に対して、この時点での三島は、「やはり殺すべきだったのでしようか」といった消極的な発言しかしていないが、「憂国」「奔馬」などの後期作品、あるいは三島自身の死を考へるうえで、「行為」の思想に関しての里程標となつてゐると思ふ。

作者・三島自身も、作中の溝口と同じく、男性性や社会的役割からの疎外を痛感してゐたであろうことは、『仮面の告白』などからも推測できる。そして、三島は、男性性を発現することを、ついに「死」へと到達するまでやまない「行為」という概念によつて果たそうとした。のちに、「純粹行為」というタームで説明されるよう

に、この「行為」とは、一般に使用される意味とは異なり、その行為のあとどうなるかといった結果は無関係である。「行為」するこゝとだけが独立し、「行為」の意味を熟考する「認識」を避けてしまふ「死」は逃避にすぎないのではないか、という疑問は当然わきおこる。それでも、三島は、何らかの目的をとげるためではなく、行為自体に、男性性の発現を託すのである。この行為は、無目的であり、現実の社会からは切り離されてゐる。(もつとも、いくら自律してゐるとはいへ、行為するかぎり、たとへば金閨放火のように、社会にかかわらないわけにはいかないのだが)。

自己の性アイデンティティを確認して、それまで疎外されてゐた男性性を回復しようとするこゝと自体は、男性性として、当然の欲求であろう。しかし、その自己実現が、作品『金閨寺』に描かれてゐるように、相補的な関係を欠いて、「行為」だけが自立してしまふ形でなされ、それが、社会に派生していけば、重大な危険性をはらんでくる。作品『金閨寺』からは、このように社会的な影響へと問題が派生していくのだが、この問題は、そうした形で自己実現を目指すさざるをえなかつた三島自身の内的な要因の検討とともに、別稿にゆずりたいと思ふ。

〔注〕

(1) 管見では、田中美代子氏が、△私▽の犯罪を、「ある理由のわからぬ否定の衝動、『私』の身内にきざした『悪の決意』ともいふべきものによつてである」(『美の変質——『金閨寺』論序説』新潮)昭和五年(二月)と解釈している。また、遠藤伸治氏が、「認識的で論理的なこれまでの『私』では、身動きのとれなくなつ

た葛藤状況を、衝動による非論理的な行為によって打破しようとしているのである」(『金閣寺』論／『国文学攷』一〇七)と述べている。本稿は、両氏の「ある理由のわからぬ否定の衝動」「衝動による非論理的な行為」の内実を考察することを目的としている。

(2) 有元伸子『仮面の告白』試論——ある、厭世詩家と女性——
——『近代文学試論』二四号)

(3) 川崎寿彦氏は、△私▽にとつての金閣を「イデア」と規定し、その「遍在・永遠・超絶性」を示している。また、有為子を、『私』の△アニメ▽となるべき運命をになつていた女性」だと解釈している。(三島由紀夫『金閣寺』——プラトン主義者の犯罪／『分析批評入門』至文堂 昭和四二年六月)

(4) 磯貝英夫氏によって、この入眠が、月夜の有為子事件を「夢の類同物に転化」させようとする作者の試みであることが指摘されている。(金閣寺——巧緻な模型——／『解釈と鑑賞』昭和五一年二月)

(5) この態度は、「恋愛をためそう」として園子に近づいた『仮面の告白』の主人公の態度と相似である。しかし、『仮面の告白』では、対象である園子自体に、主人公を「根柢からゆさぶり」、惹きつける力があつた。そして、結婚後の現実の園子には、その力が消えてしまい、△私▽には、現実を渴望しつつも手に入れることができないという空虚な観念だけが残つた。その意味で、『金閣寺』は、『仮面の告白』後の女性との交渉史であると言ふことができる。

「有為子」という像は、最後に残つた園子の像に等しいのである。

(6) 上野千鶴子氏は、「性アイデンティティ」を、「自分とは異質な存在に対する」「相互依存性の認知を通じて獲得された相補的

なアイデンティティ」と、定義している。(『女という快楽』昭和六一年一月、勁草書房)

(7) 美のかたち——『金閣寺』をめぐる『文芸』昭和三二年一月)

——広島大学大学院博士課程後期在学——